

聴覚障害の親をもつ健聴の子ども（CODA）の 通訳における役割期待と親子の関係性に関する研究

平成 28 年度

中津 真美

筑波大学大学院人間総合科学研究科
生涯発達科学専攻

（目的）

聴覚障害の親をもつ健聴の子ども（children of deaf adults : CODA）では、幼少期より親への通訳役割を担い（Preston, 1994）、子どもながら親を支援・擁護することが期待される（Hadjikakou, 2009）。したがって、CODA が担う役割の負担は大きく、特有の親子関係が形成されることが考えられるが、その関係性に関する研究は乏しく不明な点が多い。また、通訳役割の実態と、通訳の役割期待に基づく CODA の心理的状況についても明らかにされていない。

そこで本研究では、CODA の通訳役割に関する叙述から、親子関係・心理的状況の分析は可能かを検討した上で（研究 1）、CODA の通訳役割に基づく心理的状況と児童期から成人期の変容（研究 2）および親子が通訳場面に抱く感情状態と青年期から成人期の変容を解析する（研究 3）。次いで、同時期の発達段階で、CODA が通訳の役割期待を意識的に捉え始めてから受け入れるまでの期間を検討する（研究 4）。さらに、通訳の役割期待に関わる親子関係と心理的状況の構成因子を解析し、親子関係の構造（研究 5）と親子類型（研究 6）を明らかにすることを目的とする。

（対象と方法）

面接調査研究（研究 1、2、3、4）では 23 歳以上の CODA29 名、聴覚障害のある親 22 名を対象とし、質問紙調査研究（研究 5、6）では 13 歳以上の CODA104 名、13 歳以上の CODA をもつ聴覚障害のある親 97 名を対象とした。

具体的には、CODA5 名の通訳役割に関わる面接調査叙述を KJ 法に基づき分析し、通訳役割の実態および通訳役割に注目することによる親子関係・心理的状況の分析可能性を検討した（研究 1）。次に CODA25 名と親 19 名の通訳役割に基づいた面接調査叙述から、M-GTA を用いて心理的状況の概念と変容の検討を行い（研究 2）、CODA21 名と親 19 名の通訳場面における感情状態の心理尺度評価から因子分析による検討を行った（研究 3）。併せて、CODA21 名の面接調査叙述から、親の通訳役割期待を意識的に捉え始めてから受け入れるまでの期間の個人差を検討した（研究 4）。さらに、CODA104 名と親 97 名を対象とした、通訳の役割期待に基づく親子関係質問紙調査により、親子関係と心理的状況の構成因子および

親子関係を規定する諸要因の構造を解析し（研究 5）、クラスター分析による親子 57 組の類型化と関連する要因を検討した（研究 6）。

（結果）

1. CODA の通訳に注目した叙述例により、通訳役割の実態および親子関係・心理的状況に関わる情報が得られると考えられた。通訳を担うことに関する心理的情報では、自分、通訳を求める親、通訳に関する周囲の 3 領域の下位項目を認めた（研究 1）。
2. CODA の通訳役割に関わる親子の心理的状況の変容過程について、児童期では CODA は親を助け、親は CODA を頼る姿勢であった。青年期では、CODA は否定的状況である一方、親は CODA を頼る傾向にあったが、成人期では CODA は通訳と親の障害を受け入れ、親子は新たな関係性を構築した（研究 2）。同過程の感情状態では、青年期から成人期に CODA の肯定的感情は親より低値を継続し、否定的感情は減少した（研究 3）。CODA が親の役割期待を受け入れるまでの期間には、個人差が認められた（研究 4）。
3. 通訳役割の実態では、CODA は平均 5.27 歳の幼少期から頻繁に、親の課題解決の代理機能を伴う高度な役割を担う実態を明らかにした。また、通訳頻度が高い CODA は、両親とも聴覚障害者で、ろう学校卒の親が多いという、2 要因の関与を認めた（研究 5）。
4. 通訳の役割期待に基づいた親子関係は、CODA 側では 2 因子（親を積極的に擁護、親の無力さによる不可避的擁護）を抽出した。心理的状況因子は、3 因子（社会的関係における親の障害への困惑、親の障害の受け入れ、周囲からの孤立）であった。親を積極的に擁護する因子は、両親聴覚障害者で高年齢、会話成立レベルが高く親の障害を受入れる要因に規定された。不可避的に擁護する因子は、会話成立レベルが低く、高通訳頻度で親の障害への困惑を有し、高年齢で親との関わりを回避する要因に規定された。親側では、親子関係 1 因子（CODA への被擁護）、心理的状況因子 2 因子（子育ての困惑・不安、障害に対する引け目）が抽出され、CODA への被擁護因子は、子育ての困惑・不安が高く、高年齢で障害に対する引け目を有する要因に規定された（研究 5）。
5. CODA の親子類型は、Ⅰ. 回避による自律傾向型、Ⅱ. 親愛傾向型、Ⅲ. 役割逆転型の 3 類型を見出した。Ⅰ. は親子が回避的に自律している関係であり、Ⅱ. は CODA が親を前向きに助けようとし、親側は自立の志向を示す関係であり、Ⅲ. は親子の役割の逆転傾向の関係の類型であると解釈された（研究 6）。

（考察）

本研究では、CODA が親に対して行う通訳役割の実態と、その役割期待・遂行に基づいた心理的状況・親子関係に関して、発達の視点から構造と類型を解析した。CODA の通訳役割に着目することで、親子関係や社会的環境を包含した一定の情報が得られ、研究的な意義があることを示した。通訳役割とは、CODA が親をケアする機能を含むことから Young carer の側面を有し、支援の要請を指摘できた。通訳の役割期待に基づき形成される親子関係で

は、CODA の親を擁護・親の CODA への被擁護の因子構造に固有性がみられ、促進要因は親子の会話成立レベルの高さであり、阻害要因は通訳頻度の高さであった。当該因子を基に親子を類型化し、多様な親子関係の理解に関わる視点を考察した。

本研究で得られた知見を基に、CODAの抱える課題はⅠ. CODA、Ⅱ. 親、Ⅲ. 社会の3領域との関連性で生じ、これらを基盤とした支援の重要性について指摘し、広域にまた生涯の各時期にCODAに対する連続した支援指針策定に有用な結論に至った。